

有島武郎研究

— 教会退会後の自然観をめぐって

(一)

宮野光男

一

有島武郎の人間追究が「自然より都会へ」という言葉によって表現されるような質的变化を遂げたことについては、すでに指摘したところであるが^(註1)、このことは有島が自然から全く無縁の者となつてしまつたことを意味しているわけではない。自然は生来の「自然癖」^(明33・3・14)両親宛書簡が米國より帰國してからも持ち続けられていたというだけではなく、有島の精神生活においても重要な位置を占める言葉であり、ある意味では有島の精神構造を説明するためキー・ワードであつたといふことができるのである。

本論においては、教会退会後の有島の精神史を跡づける試みを、この自然観を手がかりとして行つてみたいと思ふ。それは、直接的には先に公にした自然観に関する小論^(註2)に続く考察ということになるが、有島の教会退会という出来事が、「人間イエス」への憧憬に支えられたものであり、それ以後の生活が、それを思想化し生活化するための具体的な場であつたはずだといふ仮説を裏証する一つの試みでもあるという意味において、有島のキリスト論を中心に論じた小論^(註3)に続くものであるといふことができよう。

二

明治三十九年九月一日、ニューヨークを出発してヨーロッパ遊歴の途についた有島は、ナポリで弟壬生馬と再会した。その後四十年一月、パリで別れるまで壬生馬とともに各地を訪ね、同年四月十一日、日本に帰つて来るのであるが、有島の渡歐より神戸に上陸するまでの数ヶ月間の記録は観想録および『旅する心』^(大9・11)に詳^(註4)である。この時期の自然観をみると、たとえは、ベルリンのホルスタイン・ホテルの窓外にインハルター停車場を望見しつつ、

自然如何に狂ふとも其声には常に破る可からざる調和あるものを、人自然の一分子と生まれて何故にしかく自然の調和を破るに巧みなるや。^{(新潮社版有島武郎全集第10巻・観想録(日記)、以下書名略)}

とその感想を述べているが、この記述の中に当時の有島の自然観の特色を見ることができるのである。すでに指摘したように^(註5)、有島の帰國以前の自然観は、自らの信仰や人間観の変化に伴つて、その度に自然の様相を変化させるといふ、いわば遠心的なものであつた。しかし、先の引用から理解されるように、この時期になると、有島

の自然観は、自然の本質を調和と完全さとして、しかもそれを固定してその自然に対比して自らを欠ける存在として認識をするという求心的なものに変化しているのである。その本質が調和であり完全さである自然は、かのロマン詩人たちが歌いあげた霊化された自然の俤をとどめたものであるが、それはすでに帰国の途につく前の自然観にみられたような汎神論的な自然としての認識に重点が置かれているのではなく、もっぱら対象としての、否定的存在としての人間に中心がおかれて描き出されているところに特色があるということができよう。

帰国後約半年の後の十二月、東北帝国大学農科大学、つまり旧札幌農学校の英語の講師となつた有島は再び札幌の人となつた。以後明治四十三年に教会退会を決議するまでの間、表面的には札幌独立教会の日曜学校長を務め、また教会の常議員に挙げられる（明41・1・26・日記）など、熱心なキリスト教信者としての生活を守っていた。勿論その間にも制度教会および慣習化し形式化してしまつた教会信者に対する批判と嫌悪の情とはますます強まり、遂には教会否定より教会退会へと進展して行ったことはすでに述べたところであるが、それは他方耐え難いほどの人間不信の念を惹起し、人間の手になる全てのものへの不快の念を相乗的に深めてしまつたのである。たとえば札幌近郊藻岩山登山のとき、かつては森林であつたところが耕地に変えられてしまつてゐる姿を見て、

斯くして、自然は年々、人類に従へられ、遂には人類の手の触れない処は無くなるであらう。然る後、この地上に生れたる者こそ禍なる哉！原始の姿そのまゝの自然の見出し得ぬ環境に置かれたならば、如何なる変化が人間性に來るか。想像さへも

出来ない。恐らくは、その時こそ、再び悲しむべき廢墟より救ひ出されることのない、人類の完全な墮落の時であらう。（明41・3・28、日記）

と、その感想を録しているが、これは単なる懐古趣味の披瀝ではあるまい。人工的自然、それが廢墟でしかありえないということは、自然を廢墟と化してしまつた人間それ自体が、決して新たな生命を生み出すことのできない廢墟的存在であるという人間観の描出に他ならないと思われるのである。

ところで当時の有島には、もう一つの異つた自然観があつた。それは意志を持つた自然を予見させるものである。

雨滴が窓をはたはたとうち、窓外は一面の闇である。葉の落ちた椴の樹は、骨ばつた魔法使の様に立ち、瘦せこけた胸に似たその枝を幻の様に揺つてゐる。汝、老いぼれ奴、余を愚弄し、呪ふが如くに、何の魔法を使つてゐるのか。雪が溶けて、あちこちに円く姿を見せてゐる黒地は、悉く何か恐ろしい怪物の性格好な口の様に見える、余を愚弄しようとして、その口を出来るだけ大きく開いてゐるかの様に見える。自然が余を愚弄するならば、余には堪へられない苦しみである。余は其時、凡ての抑制を失ふ。汝、悪戯な自然よ、余を愚弄する勿れ。汝の知る如く、余は人生の淋しき客である。余に味方し、余を賤しむる勿れ。

汝の胸に余を抱け。（明41・3・30、日記）

窓外に自然の息吹きを感じながら、有島はその中に人間に働きかけるある否定的な力を感じているのである。「愚弄する自然」「悪戯な自然」「汝」と呼びかけられているこの自然は、かつて有島の

イメージの中に存在した「恋の女神」(「明36・10・27、日記」)や「人慣れぬ深窓の少女」(「明37・9・26、日記」)と呼ばれている自然よりも、より透明で得態の知れぬ存在であるということができよう。不可抗的にせまって来る自然から有島は時には「死の囁き」(「明41・5・2、日記」)をも聞くのである。

すでに述べたように、有島のキリスト教否定および教会退会という一連の行為が、内的にも外的にも疎外された状況からの脱却と、自己確立への志向に支えられたものであるならば、その決断の主体はあくまでも有島自身であらねばならず、その時有島はすべてのものから自由であったはずである。確かなものは全てのものから独立した自己のみであると認識したからこそ、友人足助素一が有島に姓名判断によって改名を勧めたときに、

若し理外の理を信するならば、一判字家の所説を信するより、基督が神の独子である事其外基督の伝説の総てを信する方が遙かに善い。(「中略」)出来ない迄も自己が自己の主となり自分の道を開いて行く外に道はないと信する。(「大7・7・14付書簡、叢文閣版有島武郎全集第九巻」)

と書き送ることができたにちがいないのである。このような自律的人間を志向した有島であるならば、先の意志を持った自然、あたかも運命という言葉に置き換えられるような超自然的支配力は、当然否定さるべき過去の幻影でしかなかったはずのものである。それにも拘らず、自然をこのように人間の意志とは無関係に人間に働きかけるところの意志を持った存在として捉えているのはいったい何故

であろうか。あるいは、むしろこの時点においては有島の心的状況の不安定さを表わす一種の比喩的表現としておく方が妥当なのであろうか。

明治四十一年前後の有島の心的状況は、概ねこのようなものであったのである。

三

周知の如く明治四十二年より大正四年までの数年間の有島の日記の量は非常に少い。これは、有島が日記を書くことを無益だと考えた結果しばらくの間書き止めた(「大5・3・26、日記」)ためでもあるが、それにもまして大学時代のものを自分の手で焼却してしまった(「大5・4・7、日記」)ことに由るのである。しかのみならず、作家生活に入ってからというものは、日記自体がより身辺雑記的なものへと変化したために、有島の精神史を跡づけるための資料としては若干不足を感じることも事実である。自然観についてもそのことは云える。しかし、このことが直ちに有島の自然への興味が減少してしまったことを意味しているわけではない。書簡・評論・あるいは作品には、相変わらず自然についての叙述が多く見られ、生来の自然癖もさることながら、有島の精神状況を説明するための資料には事欠かないのである。以下、上述の資料を中心に教会退会以後の自然観を考察してみたい。

有島が白樺派の作家の例にもれず、後期印象派の芸術家を高く評価していたことは周知のことであるが、それは彼らの「新しい傾向」が「自然が魂を脅かす様を五官だけを働かして唯見守った態度や、

魂を出し抜いて自然と自然とが交渉した跡を浅く尋ねる態度」を克服した「魂に行く傾向」だったからである。「『草の葉』大2・7」
「仮相を剥いで魂にまで行く生活、それはまさに「魂を通じて人と自然とを眺める」生活を意味している。有島はロダンについて「彼の作品は自然と彼の個性とが取り結ぶ婚礼の聖状である。」
「『反逆者』明43・11」と云い、あるいはまたイブセンが「深遠なる詩人的本能の機微を示」(『イブセン雑感』明41・3)すことのできたのは、「自然」が「詩人を得て新たな呼吸を為しつゝあるを見るべく、自然と人生との緊密交渉を描きて前人の足跡なき領土を開拓」したからだと云っているのも、つまりは彼らが魂との対話者として自然と相対していたことをそのように表現したのであろう。「魂を通じて人と自然とを眺める」ということは、「人と自然とによって生み出される魂」を求めることでもあるからである。

有島が「魂を通じて人と自然とを眺める」生活を作品の中に形象化したものが、『生れ出づる悩』(大7・9)であるということができよう。

私は「生れ出づる悩」に於て、凡て誕生を待つよき魂に対する謙遜な讃歌を唱へようとした。自然は大きな産褥だ。私はその産褥の一隅につつましく坐って華やかな誕生を祝する歌手でありたい。「『生れ出づる悩』—— 広告文」

「自然は大きな産褥だ」というところに、有島の自然にかけた期待を見出すことができよう。それは魂を生み出す期待なのである。

「『生れ出づる悩』は(中略)兄によりて暗示を受けたる所産」(大7・3・25、木田金次郎宛書簡)であると述べているが、作中の「私」は、本田秋五が、『生れ出づる悩』が「いわば人としての有島武郎を直接にあらわしている単純な作品」(新潮文庫版解説)と云っているように勿論有島自身であるし、「木本青年」が有島の木田金次郎の中に見出した本当の芸術家たらんとして努力している人間の本质を形象化したものだということができよう。「私」の前に出現した一人の少年の差し出した幾枚かの絵について、「私」は「自然の観方が不親切な事」を指摘するのである。それから十年後に小包で届けられた三冊の手製のスケッチ帖——それにはかの少年が十年経ってまた画き始めた絵が集められていた——を見た「私」は、「それは明かに本当の芸術家のみが見得る深刻な自然の自画像」であることを知って思わず胸打たれたのである。

「私」は「誰も気も付かず注意も払はない地球の隅っこで、尊い一つの魂が母胎を破り出ようと苦しんでゐる」姿を木本青年の姿の中に見出すことができた。それはまさに「唯一人で忍ばなければならぬ煩悶——痛ましい陣痛の苦しみ」であり、魂の誕生の苦しみなのである。その魂が——有島のロダン評の言葉をもってすれば人格が——自然とびつたり隙間なく溶け合うところに、有島のいう「素朴な忠実な自然の礼拝者」(大8・8・22、木田金次郎宛書簡)が生れ出るのである。

四

ところで、有島がミレーについて「人間と自然との有機的な融合

を成就した」(『ミレー礼讃』大6・3)と云っているのは注目し値することである。ここで有島がいうところの有機的関係とは「自然が自然を語らせるためには、人を通して語る他はないのだ。自然はどうしても先ず人の言葉に翻訳されなければならぬ」ということを意味しているのであり、その主体があくまで人間の側にあることを示しているのである。このことは、有島の自然観が人間の可能性を肯定しなければ成立し得ないものであることを表わしていることにもなる。靈化されたよき自然は『よき魂』からしか生み出されないものだからである。

第二節で述べたように、靈化された自然に對比されて明らかになつた人間像は、調和と完全さをその本質において破壊する廢墟的存在であった。このような否定的人間観からは、とうていよき自然と有機的関係を結び得る人間像は生れてくるはずがないのである。それにも拘らず有島が自然と有機的関係を結ぶことが自然と人間との本来的な関係であるというところに、有島の理想としての人間像が、自律的な自己充足的なものであったことを読みとることができるのである。

有島がミレーの中にみたような自然観は、岩野泡鳴の「敏活な神経が自然と燃え合ひ、流れ合つて、自然に感じがあるのが神経、神経に形が現はれるのが自然。僕らは自然の裏に活物を認めるのでなく、自然その物が神経的活物となつて見えるのだ。それが乃ち自然のイリュージョンであつて、つまり自己その物の影であるから、その作物が作品と共に生命を保つことが出来るのである。」(『自然主義的表象詩論』明40・3、帝國文学会春期大会演説)という考え方と同じ性質のものであるということができよう。大久保典夫は、

泡鳴の方法意識が、エマソンとの出合と、彼自身の詩作の体験に端を発したものであり、文明開化によって生じた社会変動と外来思想の摂取とによって生じた精神の波動を、自然の全的肯定のもとに強引に一元化せんとする精神を持っていたと云っているが、自然を魂の所産であると考え、その中に融け入り、一心同体とならんとする求心的憧憬をもっていた有島は、その意味において共通の精神的基盤を持っていたということができるのである。大正六年、有島は「国民新聞」紙上にて泡鳴と描写手法に関する論争を行っているが、底流となつて自然との有機的関係を尊重する泡鳴の態度に対しては、「敬服してゐます。」(大7・9・22、富沢美穂子宛書簡)という気持を表明しているのは興味深いことである。

有島の自然観が、このように、いわば魂の所産としての自然を希求するものであり、その前提としての個性の無限の拡大の可能性が考えられていたということは、有島の自然主義批判を見ることによつても明らかである。

有島の自然主義批判には二つの傾向があつた。その一つは、文学論争という形でなされた日本文学史における自然主義への批判がそれである。『近代文学論争事典』(昭37・12)において伊狩章が取りあげている「『平凡人への手紙』をめぐる論争」などがその例である。もう一つは、十九世紀後半に行われた西欧の、とくに人間を自然法則のもとにおかれた物的存在とみて、自然科学的方法によつて解明できるとした自然主義に対する批判であるということができよう。それは日本の自然主義がともすれば見失ひ勝であつた科学性に対する批判がその中心であつたという意味において一つの特色を

持っていたということができるのである。

自然主義の作家が「科学の固定的な静学的な見方に殉じ」た結果、人間が「自然を自己の内に取り入れて、その中に生活せずにはいられない」、いわゆる自然を愛する心を、失ってしまったのだ、と

『自我の考察』（大6・11）において述べているが、この考え方はさらに『泉』（大10・5）において、

人間的の意志が否定されて自然の力が極度に尊重され、生活現象そのものが自己の意志の独断的な表現として取扱はれるに至った結果は、人生に対しての宿命的な約束が、おのづから成り立ちました。或る情け容赦のない大きな力、その力が人間の生活を勝手気儘に導いて、人間は如何に努力しても、もがいても、結局その圏外に脱逸する事は出来ず、その大きな力なる運命の傀儡として存在するの外はないといふのが、自然主義の芸術からひとりでは帰納され得べき結論であります。その結果として、私共の生活には、自主的な能動的な力が段々失はれて行き、一種の諦めが人々を圧倒するに至りました。

というように、自然主義の考え方が、いかに人間を宿命的に疎外するものであるかを指摘しているのである。勿論この中で用いられている「自然の意志」という言葉が、科学によって明確にされた自然界における因果律を意味していることは云うまでもないことである。

自然主義における科学的方法が、人間の現実の姿を赤裸々に描き出して見せ、そのことが人間をどれだけ啓発したかもわからないし、「今まで高い道徳であるかの如くに、公々然と行はれて居た諸々の

偽善や、虚飾や、陋習やが散々に引き裂かれて、一抹の清新な涼気が送り込まれた」ことは一応その功績であったと認めはするものの、やはり人間の生活が無味乾燥なものとなり、その精神活動は弛緩し、個性の自由にして無限の拡大を阻げてしまったという事実を看過することはできないというのが有島の主張なのである。

× × ×

有島が作品において自然主義の、就中その科学的な人間理解のしかたを批判し否定しているものとしては、まず『宣言』（大4・7 10～12）をあげることができよう。

『宣言』は生物学専攻の学生AとBとの間に換わされた往復書簡夫は「A宣言Vの執行者」としてBを、また「いつでもA宣言Vを待つ受身の人間」としてAを考えるという差はあるにしても、AもBも共に「裸なる真実、いつはらざる誠実」を追究する者であるという意味において有島の内心の声の代弁者であるとしているが、これは正鵠を得た観方であるということができよう。事実、科学的な人間理解の方法が本質的にいかに人間を疎外しているかを指摘し、そのような考え方をいかに戦っているかということ、Aは、

種の持続のために、自然が作った狼狽とはこれをいふんだらうか。意識を打貫き、心を打貫き、霊を打貫いて、なほその奥までにも這入りこんで、存在の根底を自在に揺り動かすこの恐ろしい力が、単に生殖といふ自然律を保存するための道具に過

きないといふのか。こんな人間内部の神秘的な活動が、知能だけで軽く扱はれて結論を下されるのを、僕は人生に対する侮辱だと思ふよ。この頃の僕の生活は、どの断片を取って見ても、科学の組織を根こそぎにすることが出来るようにさへ考へられる。

と云つてゐるが、このAの主張は、B、

Mutation Theory の反駁者に対して、ドフリスの爲めに援護の陣を張ろうとするのだ。僕に取つてドフリスの主張する突然変種は可能事だ。僕の内部的要求はその可能性を信ぜしめる。

という考え方と本質的には同じものだとすることができよう。すなわち人間の生命現象と、それを支えている根源的なエネルギーとが「単に生殖という自然律」によってのみ説明しつくされるという考え方が「人生に対する侮辱だ」というAの主張、それは人間の「内部的要求」、すなわち内発性に支えられたところの、個性的で何ものにも砕けつけない無限の可能性を秘めた生命を信じたいというBの考え方の逆説的表現なのである。「僕の内部的要求はその可能性を信ぜしめる」というBの言葉が、彼らの科学者としての限界を明らかにしていると同時に、人間として新しく歩き出そうとしているその姿勢を見ることが出来るのである。そして、このA、Bが、ともに有島の生き方を写し出した分身であるということは「惜みなく愛は奪ふ」(大9・6)の中のつぎの一節からも明らかである。

私の個性は 或る巴みがたい力に促されて、新たなる存在へ躍

進しようとする。その力の本源はいつでも内在的である。内発的である。一つの花から採収した月見草の種子が、同一の土壌に埋められ、同一の環境の下に生ひ出ても、多様多趣の形態を取つて崩れ出づるといふドフリスの実験報告は、私の個性の欲求をさながらに翻訳して見せてくれる。「傍点筆者」

「僕は、勿論、科学的良心を忘れて、事実の否定を冒してまで、暗示を弁護するやうな事はしない。然し突然変種の解説が決定することは、僕にとって、科学的勝利以上、性格の満足完からしめるであらう。」——『宣言』のBはAにこう書き送っているが、大正六年「中央公論」に発表された『実験室』という作品は、科学的勝利が人間的敗北につながるものであり、さらには「性格の満足」すら否定されなければならぬ人間の事実を明るみに出してしまった事実を描いたものとして、有島の二重の否定を表現した作品であるということができよう。『宣言』において暗に示された科学的方法への不信、科学的人間観のもたらす人間観への反駁は、『実験室』において、有島の生き方に対する一つの根源的な問として提出されているのである。

『実験室』の主人公三谷は「科学の研究に一生を委ねようと決心した」医師である。「學術に忠実であらねばならぬ」と思う三谷には、親であろうが妻であろうがそれは「一個の実験物でしかない」ものだといふのである。

三谷の妻Y子は夫の務めている病院に入院していたが多量の咯血をして死んでしまふ。

三谷の上司である院長や他の医員たちはY子の死因が急性乾酪性肺

炎による極度の衰弱に起因すると考えているのであるが、三谷自身は臨床診断の結果から総合的に判断をして、粟粒結核が直接の死因であると考へるのである。医師であり科学者である三谷にとっては、「妻の死因に対してさへ自分の所信が軽く見られてゐる事」を「侮辱にさへ考へられ」始め、「仮りにも縁があつて妹となつてくれたものを、お前はじめ冷やかな心で品物でも取り扱ふやうに取り扱ふ人達ばかりに任せて置く気にはどうしてもなれないんだ」「生活は実験じゃなれないものな」と云つて強硬に反対する兄の意見にも拘らず、死因究明のための解剖を強行するのである。

自分は医師であり又病理学の学徒である。自分は総ての機会に於て自己の學術に忠実でなければならぬ。ここに一個の死屍がある。その死因の断定に対して一人だけ異説をもつものがある。解剖によつてその真相を確かめる外に途はない。「中略」自分としては自分の主張を実証するには自分親ら刀を執るのが至当だ。その場合解剖台の上にあるものは、親であらうが妻であらうが一個の実験物でしかないのだ。自分は総ての機会に於て學術に忠実であらねばならぬ。

三谷のこの決断には、科学者であらうとする者の基本的な姿勢と、その可能性への確信が漲つており、情の次元における人間観を圧倒しているといふことができよう。

解剖の結果、三谷の診断どおりその死因が粟粒結核であつたことが実証された。三谷は科学者としての勝利を得たのである。科学者は、自然界の因果律が正確に行われつつある事実のみを摘出してみ

せることのみはその存在の意義が保っているのだという信条を、三谷は自らの生活の中で実現することができたのである。しかし、三谷は最後まで勝利の快感に浸っていることはできなかった。解剖の最中に、ふと心に忍び込んできた科学主義への疑念——「生活と學術とどっちが尊い。我れを見失つてどこに學術がある」という思いが、妻の胃壁にこびりついている血糊を発見したときに爆發的に拡がって、三谷を完膚なきまでに破きのめしてしまつたのである。

「私はもつと生きてゐたいんですから、先生、どうか助けて下さい。殺さないで下さい。どうか……あゝ痛い痛い痛い……死ぬのはいやです……私は死にたくないんです」「こんをぢや……血が無くなるだけでも死にます……コップ……コップを下さい」そう云つてY子は咯き出した血液をコップに受けて飲みほすのである。三谷は胃壁の血糊から、この時の情景を思い出してしまひ解剖を続行することが不可能になつてしまつたのであるが、それは決して妻に対する夫としての憐憫の情がそうさせたのではない。不気味なほどの迫力をもっているこの場面は、人間の死に対する激しい抗議が、換言すれば生へのすさまじい執着の姿が描かれているのであり、三谷はその姿に接した瞬間から、それまで墨守していた科学者としての生活が、まことに空虚なものでしかなかつたことを痛感したのである。人間として本質的に満たされぬ部分があり、そこは科学者の手をもつてしては触れ得ぬ領域であるという事実を知つた驚きと焦燥感とが、一種の空虚感となり「真底から哀愁に揺り動かされ、自暴自棄にさいなみ苦しめられ」てしまつたのである。彼はさらに、実験中の自分の心中を省みて、「何処か物足りない不思議な感じ」があつたことを思い出した。しかもこれまでも「重大な研究結果

を発表する喜びに際会した時でも」「一抹の物足らなさが付きまっはってゐた」し、ずっと過去に遡って考えてみると、「科学の研究に一生を委ねようと決心した時にも、彼は自己を或る程度まで殺してかゝる覚悟をした苦痛」を感じたが、それまでも、実は現在の絶望感と無関係のものではないことを知り、三十年間かかって嘗々と築き上げてきたものが、砂上の楼閣の如く、がらがらと音を立てて崩れ去ってしまったのを覚えるのである。

医師三谷が隻眼の男として描かれているのも、科学者として生きることが、人間として完全な生き方であるとするその主張が、有島にとつては真理の一面のみしか理解することのできないことなのだという事実を、まことに象徴的に示しているということができよう。ここにも有島の、自然主義によって代表される科学的人間観に対する批判の一端を見ることができるのである。

『実験室』の主張は、有島の、個性の無限の拡大を信じ、外界に向つて放射するエネルギーの内在性と内発性とを主張する根拠を自己の内部に見い出そうとする試みの逆説的表現であるといえよう。

しかし、有島は、『実験室』の中で三谷という存在が、自然の中に見い出すことのできる個性、すなわち凡てのものを流動し流転させる力——それは広義には自然の力であろうが——「独自の人間の中にあつて働いている力」「本能そのもの」に全存在をかけて生きようとしている人間であるとは云っていない。あくまでもそれは科学的人間観に生命のよりどころを見い出すことができなかつた者を描くという意味において「性格の満足を完からしめる」ものを探求しなければならぬ者として描かれているのである。このことから、本節の冒頭において指摘したように、自己充足の人間観を前

提にしなければ成立しえない自然観と有島の現状認識とのギャップを、再び問題にしなければならぬのである。

五

有島は「自然そのものである芸術家自身」「『芸術について思ふこと』大11・1」であろうとし、またそうでありえたと思つていた芸術家の中に自己の理想とする人間像を刻んでいたのである。それが、たとえばミレーであり、ロダンでありイブセンであった。就中ホイットマンの所謂ロープアーをその典型として想定し、キリストをもその延長上に見ようとしたのであるが、有島のこの自然観は、その意味では「人間イエス」への憧憬と本質的に同じものであり、それへの芸術への反映であるといふことができよう。

本論において考察した自然観は、主として、肯定的な、いわば慰藉する自然の系列に属する自然をとりあげたが、このことは、否定的な、罪の告発者としての自然の系列に属する自然が有島の精神構造から姿を消してしまったことを意味しているわけではない。実は、本論の第二節において指摘したような、不完全な調和を破る存在としての否定的な人間観と相まって、さらに根強く、あたかも科学的人間観のもたらす決定論の反映であるかのような意志を持った自然をその内容とする自然観となつて、有島の精神構造の中に定着している事実として解明されなければならないのである。

「人間イエス」への憧憬が、あくまでも憧憬であつたように、その反映としての「我」すなわち「本能」である自然に生きる生活も、決して有島の生活の中で実現していたものではなく、あくまで

も理想状況でしかなかったということも、実は、それを否定する自然——有島を根底から支配せんとする他者としての自然を解明することによって明らかになることなのである。したがって、この問題は、単に「美と労働の対象としての二重の性格を帯び」（山田昭夫・前掲書）た自然の一方を労働の場であるか、あるいは人間が闘うべき対象——場——として規定するかということだけではなく、むしろ自然をそのようなものとして観なければならなかった有島の否定的人間観を考察する手がかりとしての意味をもったものとして追究されなければならないのである。この問題については、さらに稿を改めて考察したい。

——一九六七・六・三——

註1・2・5 有島武郎研究——自然観にみられるキリスト教の受容と定着の考察——〔昭38・12、国語教育研究第8号〕

註3・6・7・10 有島武郎研究——キリスト論を中心に——〔昭41・11、国文学研究第2号〕

註4 この期の資料としてはその他に、

- (1) 有島武郎滞欧画帖およびその付録解題〔昭38・9、有島生馬、瀬沼茂樹〕
- (2) 有島武郎未発表書簡四十六通——外遊時代——〔一〕、
〔二〕およびその解説〔昭39・8〕9、瀬沼茂樹、国文学〕
などがある。

註8 大久保典夫『岩野泡鳴』（昭38・11、南北社）

註9 山田昭夫『有島武郎』（昭41・1、明治書院）